

元地方公務員。

「国民皆保険医療制度の維持」

つい最近、知人から聞いた話である。

ある男性が、アメリカへ一人旅に出掛けた。ところがその途中、大病をしてアメリカの病院に三カ月入院した後、亡くなった。しかも、悲嘆に暮れていた奥さんに突き付けられたのは、病院からの多額(二億七千万円)な治療費の請求書だったという。奥さんは、泣く泣く家屋敷を四千万円で売り、無一文になって何とかけりをつけたそうだ。これが事実であれば、たとえ旅行のさいに医療保険に未加入だったミスはあるにしても、あまりにも無茶な話ではないか、と思った。十年前アメリカに留学していた息子も、高い医療保険料や高額な病院の治療費を嘆いていたので、知人の話も全く嘘っぱちな内容ではなさそうだ。

それに比べて、日本の国民皆保険医療制度のすばらしさを、改めて再認識した。

だがしかし、このところメディアでいろいろと取り上げられている、この皆保険制度の将来は、どうであろうか……。

端的に言って、国民の医療費給付は際限なく膨らみ続けており、その最たるものが老人医療費である。厚生労働省の推計では、国民医療費は二〇〇四年度の三十二兆円から二十五年度には六十九兆円に急増する。この間七十歳以上の医療費は、十三兆円から四十一兆円へと三倍に膨れ上がる見通しだという。

このままでは各医療保険の財政が危機にひんし、国民皆保険制度自体が破たんしかねない状況だというのは、火を見るより明らかだ。高齢者も、大いなる不安と焦りを感じている。

それでは、どうすればいいのか。

今政府では、混合診療や大幅な患者の自己負担増、診療報酬の引き下げ、医療費の「マクロ管理」案など、総合的な医療制度改革が検討されているようだ。

でもこれからは、政・官・業の一体的な取り組みだけでなく、

医療消費者である国民一人一人が己の命にかかわる最重要事だと認識して、真摯に考え、活発に発言し行動することが求められているのではないだろうか。

先日、あるボランティアの集まりで、七十代の女の人が、「納めた健康保険料を、少し還元してもらいたいと思う」と言った。

若い時から食事、心の持ち方、運動などの自己管理を徹底してきたから、これまであまり病院にかかったことがない。もし個人の健康維持に対する奨励措置として、保険料の減免や還元措置があれば、それが弾みとなって、もっと健康への自助努力をする人が増えるのではなからうか、との主張である。さらに、

人の命は、もとより天にうけて生まれつきたれども、養生よくすれば長し、養生せざれば短し……これみな、人の仕業なれば、天にあらずといえり…… という貝原益軒の『養生訓』を引用しての話は、説得力があった。

が、私は共鳴する部分もあるが、健康保険料の直接的な減免には異論がある。それよりも、点数制の「健康保険貯蓄制度」を設けたらどうか、と考えている。

具体的には……日ごろから自分の生活の質を高めて健康を維持し、医療費を使わない人は、年々、一定の点数を積み立てていく。六十歳過ぎてから病気になった場合に、その点数を使って医療費を減額する仕組みだ。

とにかく、「予防は治療に優る」との思想のもとに、医療体系の基本的な発想の転換が大事ではないか。そして、それを効果的な施策にするために、政府は健康や医療に関する情報の提供を徹底してもらいたい。特に西洋医療だけでなく、それを代替する医療や食生活関連まで含めて、幅広い正確な情報を発信してほしい。そうすれば官民あげての積極的な努力で、老人医療費を軽減し、国民皆保険の医療制度は維持できる、と信じている。